

編集後記：以前は読者として毎月の「天気」の目次をみて関心のある記事を読む程度でした。天気編集委員会に参加したこの2年間は、編集上の工夫や配慮などを知るとともに、学会の機関誌としての「天気」の役割・課題などを考える機会ともなりました。

時を同じく、新型コロナウイルスパンデミックとなり、本年に入ってからウクライナ危機が起きています。影響は全世界に及び、この先を見通すこともできず、まさに激動の時期にいることを感じます。もっとも、危機や激動といった言葉は、今に限らず度々使われてきたように記憶します。地球環境関連では、例えばローマクラブが1972年に公表した「成長の限界」で地球の危機が指摘されましたし、地球温暖化についても早い段階から科学的な指摘や警鐘がなされました。その理解や対処への議論が進まないとの苛立ちもあるなか、やがて国連の会議や仕組み・条約などへと形を整え、対応・対策が広がってきたことも事実です。地球温暖化対策では楽観はできませんが、脱炭素へ向けた取組は本格化しているようにもみえます。

自然や社会の変化、科学技術の発展などに対して、社会の仕組み／制度が十分についていけない、あるいは問題が顕在化しないと対応できない状況はよく見う

けられます。そのような環境の変化に伴って、市民の問題意識が変化・醸成し、さらには法制度などが整うまでには、一定の時間を要することはかなり一般的なことのようです。地球温暖化対策もその例といえるでしょう。環境の変化などへの対応をタイムリーに行うには、市民などのステークホルダーが当初あるいは早い時期から気づきや課題を共有できる仕組みや仕掛けも重要だということでしょうか。

話題を戻して、「天気」は、邦文の学術論文等の掲載、気象や関連する動向の解説、学会の活動周知など、多機能です。「投稿案内」で25種に分類されるほど多様な記事が掲載されています。これまでの歴史がありますが、社会の変化などにあわせて記事の内容や発刊の形態を、今風へと変えていくことへの期待の声もあります。同様に、気象学会の活動や運営に対しても社会の変化を踏まえた意見や期待があるものと推察します。それはともかくも、天気編集の立場からは、読者(会員)や投稿者の意見や理解を得ながら、あるいは双方向性も考慮してSNSなども活用し、記事の内容、見やすさ、タイムリーな発刊などで、工夫できることがあるのではないかと感じた2年間でした。

(橋田俊彦)